

“ The Half-Brothers ”

痛ましい自己犠牲

中 村 祥 子

(1)

“ The Half-Brothers ”(「異父兄弟」)は物語集 *Round the Sofa* (『ソファ - を囲んで』1859)の最後に収録されている作品で、「Westmoreland の地主 Preston 氏」(前置き)が自らの体験談として語ることになっている。作者は *Round the Sofa* にこれを付け加える際に、先に地主の妻 Preston 夫人が語る “ Half a Life-Time Ago ”(「今から 30 年程前に」初出は 1855)と並置する意図で創作したことは明らかである。

この作品は、語り手が 16 歳の時、雪の丘陵地帯で遭難し、探しに来てくれた 19 歳の異父兄 Gregory に助けられるが、兄の方は凍死するという物語である。従ってこれは Gregory の自己犠牲の物語である。作者は他に幾つも自己犠牲を扱った小説を創作しているが、この Gregory の行為は特に “ The Sexton’s Hero ”(「寺男の英雄」1847)の Gilbert の行動を思い起こさせる(主人公が共に G の頭文字を持っているのは示唆的である)。Gilbert は、元の恋人とその夫とを満潮の湾の水脈から救ってやって自分は溺死するからである。

しかし、自分の命と引き換えに他者を救うという設定や、主人公の直接の死因が自然の猛威によるなど著しく共通項のある両作品ではあるが、自己犠牲の中身は大きく異なる。Gilbert の自己犠牲の方は肯定的に描かれ、作者に賞揚されている。それは彼の行為が「他者に危害を加えることで表される、キリスト教精神に反するお粗末な英雄的行為」(102)(= 「勇壮な軍人たち」(101)の戦功)と対照的なものとして描かれているからである。つまり作者の主眼は真の英雄を定義するところであって、やや図式的ではあるが、争いごとが嫌いで他者を助けた Gilbertこそ英雄の名に値すると肯定することで、軍人の戦場での英雄的行為を否定し、ひいては戦争を批判しようとしているからである。

それに対し“ The Half-Brothers ”での自己犠牲の扱いは単純ではない。一般に Gregory の死については、“ 自己の喜びを否定し、「他者を喜ばせる者」の気高い行為 ” (Ward xxii)、「悲壮な犠牲」 (Sanders 109)、「自己犠牲の美しい例」 (Chadwick 246)、“ 危険な結果も恐れずなされた「宗教的信念の力強さ」に裏打ちされたもの ” (Duthie 167)として、“ The Sexton’s Hero ”と同じように肯定的美徳という側面のみが評価されている。しかし作者はここでは、自己犠牲という行為を本来あってはならないものと位置づけている。つまり彼の死は無くとも済んだはずのものとされている。そして Gregory が若い死へと追いやられた背景の方が問題にされているのである。これは同じく自己犠牲がテーマになっているもう一つの小説、前述の“ Half a Life-Time Ago ”と共通する点である。そこでは、ヒロイン Susan の自己犠牲の人生が描かれるが、彼女には母との約束を守って弟の世話をしながら、同時に恋人と幸せに結婚する選択肢もあったと示唆されている。そして小説では、それにも係わらず Susan が自己犠牲の人生を強いられたのは何故かが描かれている。以下において、Gregory が自己犠牲を強いられたのは何故かを見ていきたい。

(2)

Gregory の死について見る前に、作品に描かれているもう一つの自己犠牲の軌跡を見ておきたい。それは Gregory の母 (語り手の母でもある) Helen の再婚である。作品冒頭で語り手は「私の母は二度結婚した」と語る。つまり Gregory は母の前夫の子である。しかも彼は父親の死後に生まれた子供だった。彼の父は Cumberland の小さな農場を借りていたのだが、若くて経験も無く、農場は失敗した上に結核になって、20歳の妻と幼い女の子とを遺して死んでしまった。更にこの子も猩紅熱で死んだ直後に生まれたのが Gregory だった。従って Helen にとって彼は亡夫と娘の思い出に繋がる唯一の者であり、特に夫の死後に生まれたことから Gregory は夫の生まれ代わりに思えたかもしれない。

しかし無一文の Helen は、一緒に住みに来てくれた姉 Fanny の僅かなお金と、姉妹で働く縫製の仕事とで辛うじて生活し、Gregory を育てようとしたのだが、やがて Helen の視力が落ち始め、「もはや細かい縫い物をしてお金を稼ぐことはできなくなった」。そして3人の生活はひとえに Fanny の肩に掛かることになっ

た。ちょうどその頃 Helen は「その辺りで最も裕福な農夫の一人」William Preston に求婚され、彼女は、Gregory の世話をよくしてくれて「彼には生活必需品の点でも教育の点でも何一つ不自由させない」という条件だけで、William と再婚する。この時 William は「40 歳をだいぶ過ぎていた」が、彼女は「未亡人だったとは言え、24 歳の夏をまだ迎えていなかった」。つまり彼女は前夫の死後 3 年経つ前に、年齢的に不釣り合いな再婚をしたことになる。

この早過ぎる再婚について Fanny は、Helen が「最初の夫をととも素早く忘れてしまっている... その確証」と考えるが、彼女の本心が Fanny の考えたのとは逆であった事は、「Fanny 伯母さんは...間違っていたかもしれないと思う」という語り手のコメントと共に、次のような描写から容易に想像できる。即ち Helen は「William Preston に妻になると約束した日以降殆ど顔を上げることもなく、決して微笑むこともなくなった」し、再婚後「夫はすぐに気付いたのだが、彼女は彼を愛してはいなかった」。こうした描写が示しているのは、Helen が Fanny に迷惑を掛けることなく亡夫の忘れ形見を育てるため、望まぬ再婚という形で自分の気持ちを犠牲にしたということである。もし彼女が裕福な家の娘であつたら、また細かい仕事が出来なくなる程目を悪くしなかったら、前夫と娘の死の悲しみがまだ癒えていないこの時点で再婚するなど彼女には思いも寄らなかつただろう。

但し作者は、William がいわば Gregory 養育の手段に利用されたわけではなく、この結婚が多分に互恵的なものであった点をも強調している。即ちこれはもともと彼の方から強く望んだ結婚であつたし、何よりも彼女は語り手「私」を生んだ。つまり William に「父から息子へと 300 年以上も伝わってきていた彼の土地...を相続するはずの、彼の肉親」としての「私」を生み、William は「息子が生まれたことを喜び、誇りをもった」のだった。更に作者は Helen がそんなに早く死ななければ、「多分、愛がやがては生まれたことだろう、もし彼が忍耐強く待ったなら」と、Helen の再婚が愛のあるものになる可能性があつたとも示唆している。

しかし結果がどのように好転しようと、彼女が生活のために再婚したこと、それが彼女の自己犠牲の行為であることは明らかである。こうした自己犠牲が本来ならしなくても済んだはずのこととして描かれているのである。そして作者は、

不本意にそういう犠牲を強いられた Helen に対して、次のような形で同情を示している。即ち前夫との結婚生活は3年足らずで子供も二人生まれたが、再婚生活は更に短くて1年足らずで子供も一人しか生まれる間が無かったと描き、前者の比重を大きくすることで、作品には殆ど語られる事のない前夫との生活の、彼女の人生における重要性を際立たせている。

Helen は、後に触れる夫との口論が遠因で、語り手を早産した上に「その翌日から身体が弱り始め」、様々な手立ての甲斐無く死んでしまう。彼女の死は、後に同じく自己犠牲を余儀なくされる Gregory の死の伏線になっているが、その場面は次のように描かれる。

彼女の最期の願いの一つは、Gregory を彼女のベッドの私の横に寝かせて欲しいということだった。それから彼女は彼に私の小さい手を握らせた。...彼女の夫が気分はどうか尋ねるために彼女の上に優しく屈み込んで、一種の厳肅さに満ちた温情をもって私達二人の小さい異父兄弟を見つめるように見えた時、彼女は彼の顔を見上げて微笑んだ、彼に対して殆ど初めての微笑みを、しかも実に優しい微笑みを。...それから1時間のうちに彼女は亡くなっていた。

ここで作者は Helen が最期に二つのことを願ったと描いている。一つは Gregory に対して生まれたばかりの弟「私」をよろしくというものである。もう一つは夫に対して、二人の子供を父が異なるにせよ兄弟として育てて欲しいという願いである。夫が「私」を大切にすることは当然分かっているのも、これは特に Gregory を「私」の兄として、つまり夫のもう一人の子供として扱って欲しいということの意味する。そして夫が「一種の厳肅さに満ちた温情をもって私達二人の... 兄弟を見つめるように見えた時」、彼女には夫がその願いの実現を保証してくれたような気がしたのである。実際にはそれは彼女の錯覚だったのだが、死んでいく彼女にはそのように思えたからこそ、夫の寛大さに感謝して、「彼に対して初めての微笑み... しかも実に優しい微笑み」を残して逝ったのである。

この二つの願いのうち、前者の願いは3歳の幼児に対するものだから、多分に彼女の精神的な満足に過ぎなかつただろう。しかし実際には Gregory はこの母

の願いをよく覚えていて16年後に自分の命を賭して弟を助けてやった。その時凍死した彼には「静かな微笑みが(彼は生涯殆ど微笑んだことは無かったのだが)もはや動かぬ冷たい顔にあった」と描かれ、その様子は母の死の場面を想起させるものになっている。彼の方は母との約束をよく守ったが、もう一つの約束は守られなかったということが強調されているのである。

(3)

Gregoryの死も、無くても済んだ自己犠牲として描かれている。そもそもこの遭難は、「私」の不注意から発生する。Wrightは“「私」には「その誕生がいわばGregoryを追い出したことになる息子」としての「存在そのもの」のために、「悲劇の責任がある」”(187)と分析しているが、悲劇に対する「私」の責任はそんな所に有るのではなくて、まさに「私」が、父の使いに行った帰路、雪が降りそうなので帰りは必ず正規の道を通って来るようにという父の厳命を守らず、勝手に時間がまだ早いと考えて、たった3マイルの近道をするためだけに丘陵地帯を突っ切って帰ろうとした、その軽率な判断にある。「私」が父の言いつけ通りに帰っていれば、最初から遭難は起こらなかったのである。つまり充分に回避できた事故だったのである。

事故に対するGregoryの反応は彼の優しい性格を示すものである。普段から彼は「私」の早生と母の死の原因として、継父から「恨みのこもった嫌悪」の目で見られ、何かにつけて罵られ苛められている。農場で働く者たちも御主人に迎合し、引退している羊飼いのAdam爺さん以外は皆(時には「私」も含めて)彼に厳しく辛く当る。「私」は「若旦那」として、父の元で農場の仕事の見習いをしているのに対して、「Gregoryは羊飼いのようなものにされた」。この相違は、「私」の方は「利発な少年」で性格も明るく皆に愛されたが、Gregoryは「愚かで頭が悪い」せいだとされているが、それはむしろ口実で、「私」は「土地を相続する肉親として」扱われているのに対して、彼は「農場で働く者たち」の一人として扱われているのだ。「羊飼い」の仕事自体は、将来農場の所有者になる者が準備の一つとして就くことはあっても(“Cumberland Sheep-Shearers”(1853)のTomのように)、Gregoryの場合は明らかに生涯「私」の農場で働く一労働者としてのものである。しかし「彼は我慢強く気立てがよく、たとえ一分も

経たない前に誰かが彼を怒鳴りつけたり平手で打ったりしても、その人達の誰に対しても親切なことをしてやろうとした。』。そういう Gregory だったからこそ、この時も「私」を喜ばせようと迎えに来てくれたのだ。普段から小才の利くことを鼻にかけているらしい「私」が、今回もきつと父の言いつけを守らずに近道をしてくるだろうと当りをつけたのかもしれない。「私」の帰りが遅いことに気付いた William を筆頭に農場の者たちが、初めはただ苛立って心配を募らせるだけであったが、そのうちに「皆が、私を捜しにどちらへ行ったらよいのかわからずに気も狂わんばかりの不安にかられて駆け回っていた時に」、既にそれより3時間も前に、Gregory は「近づく嵐に気付いて」「私」を迎えに出発していたのだ。彼は「丘陵地帯の方角を知ることにかけては彼程の若者を見たことがない」と Adam 爺さんに太鼓判を押されていたが、そして他は誰もその能力を認めようとはしなかったが、彼自身には自信があって、そういう自分が迎えに行ってやることで一層「私」を安心させようと思ったのだろう。

ところでこの場面を Bonaparte は次のように分析している。

或る日... 名前の付いていない息子の方が荒野で恐ろしい嵐に見舞われ、彼の死が不可避に思える。Gregory の方は在宅している。Preston 氏は息子が戻って来ていないので心配しいつも以上に Gregory に悪態をつき始める。Gregory はその理由を理解する。彼は悟る、Preston 氏は息子のことを心配し、その一方で継子が安全でいると考えて怒りにかられているのだと。もし子供たちの一人が死なねばならないならそれは Gregory であって、自分の息子であるべきではないと彼は言っているのだと。Gregory は同意しない訳ではない。... Gregory は自分の価値を殆ど感じていない。彼はもし必要なら愛に殉じる覚悟ができています。一言も発せず彼は家を出て異父弟を捜しに行く...。(75)

ここで Bonaparte は、Gregory が継父の無言の圧力で「私」の身代わりになるために捜索に出て行ったと解釈している（それ程極端でなくても Gregory が始めから自己犠牲を覚悟で「私」を捜しに出たとする解釈はしばしば見受けられる）が、作品の実態はそうではない。この時点では「私」の状況を差し迫ったものと

捉える者は誰も居なかった。Gregory も例外ではない。彼は丘陵地帯で簡単に「私」と出会えて、一緒に帰って来られると軽い気持ちで出発したはずだ。もし「私」の遭難を前提に捜索に出掛けていくつもりだったのなら、丘陵地帯のことをよく知る Gregory が、いつも連れてくる牧羊犬を連れ、羊飼いの杖を持ち、羊飼いのマントを羽織っただけで出発するということはあるまい。当然、あとで農場の人達が持って駆けつけたような「身をくるむものや毛布やブランディやその他思いつけるあらゆる物」の一つでも携えて行ったはずである。従って Bonaparte が言うように William がこの時継子に命を賭して弟を助けるよう圧力をかけたわけではない。

Gregory が出発する直前、William が「私の帰りの遅いのに苛立って、いつもよりもっと Gregory に対して攻撃的で傲慢な態度をとり... 彼を彼の父の貧乏のために責め、力を尽くしても何の役にも立たないことしか出来ない彼自身の愚かさのために責めた」というのは事実である。しかしだからといって Gregory が出発した直接のきっかけが、継父のこの罵りであったというわけではない。それは上で見たように、Gregory の優しさから出た自然な行為だったからと言うだけではなく、William のこの罵りは、何もこの場で特別なものだったのではないからだ。ここで彼は継子の実父の貧しさと、継子の振る舞いを罵倒しているが、こうした言い掛かりは「常に」彼が Gregory に発してきたものである。例えば Helen の死の引き金になったあの口論の時も、その発端は次のように書かれている。

或る日は彼は癩癩を起し、Gregory に悪態をつき、彼に毒づいた。彼は子供がするような何かいたずらをしたのだった。私の母は彼のために何か言い訳をした。私の父は、別の男の子供を養わなければならないことは充分耐え難いことだと言った、妻がその子の腕白をした時に金輪際しないようにさせることもしないなら、と。

ここでも William は3歳の Gregory の振る舞いと、彼の実父の、子供も養育できない無能とを非難している。16年後も継子への八つ当たりの中身は全く変わっていないのである。

そしてまさに William のこの 16 年間の態度が、問題なのである。たとえば、この時 Gregory が誰にも黙って出発したことは、彼の善意を悲劇に変えた要因の一つだった。しかし、それがいつもの彼のやり方だったからである。彼は誰かに罵倒されると黙ってむっとり座っているか、口笛を吹いて犬の Lassie を呼び黙って外へ出て行くことは作中で度々言及されている。普段から彼が自分の意見を言える雰囲気ではなかったことが、この時も彼に黙って農場を出て来させたのだ。もしそうでなければ、誰かが例えば「私」のマントも持って行くようになど、より適切な助言を彼に与えたであろう。

自分たちが遭難したと分かった時、Gregory は、一方で二人共死ぬかもしれないと考えながらも、半睡状態の「私」を自分の羊飼いのマントと更に自分が着ている上着とで包んでやった。そうしたのは、彼が母から託されていた弟を助けることを自分の義務と考えたからだ。しかし一方で Gregory の意識には、弟には父を始めとして愛してくれる者がたくさん居るが、自分には一人も居ないという自覚がある。その限りでは、Bonaparte の言うように、「Gregory は自分の価値を殆ど感じていない」のである。従って彼がこうした行動をとった背後には確かに母との約束があったけれども、この自覚が、その約束をこのように残酷な形で自己犠牲に変質させたのである。そして Gregory に、亡母以外は誰にも愛されていないと思わせ、自分の価値を実感させないようにしたのは、16 年間の William の彼の扱いであったと言える。

(4)

従って、William が妻の死の床での願いを聞き入れてこなかった責任が作中で厳しく追及されているのである。実際には彼は Gregory の遭難死には直接は責任がない。むしろ彼は「私」に帰りは必ず正規の道をとるように念を押した位だった。ましてや彼が Gregory に「私」を探して来るよう命じたわけでは決していない。なにしろその時農場では「皆が... 可哀相に、本当に可哀相に、Gregory の居ないのに気付くことすら、或いは彼の不在を気に掛けることすらしていなかった」位だったのだから。それにも係わらず William は、Gregory が我身を犠牲にして「私」を助けたことが分かった瞬間、激しく後悔をするのだ。そしてその後の生涯を悔恨のうちに過ごし、「私の父の最期の言葉は『神が父の無い子に対す

る私の冷酷な心をお許し下さるように！』というものだった。」

William をこのように激しく後悔させたものは、継子の方は我身を犠牲にしてまで「私」を母から託された弟として扱ったのに、それに引き換え自分は16年間彼を「私」の兄として扱ったことは無かったという忸怩たる思いである。そしてまさにそれが Gregory に「自分の価値を殆ど感じ」させなくした要因だったのである。彼は「[Gregory が生きていれば] わしはわしの土地を半分彼に与えたのに わしは彼をわしの息子として祝福したのに」と嘆く。これは即ち彼はこれまで Gregory を決して「私」の兄として、自分の息子として考えたことはなかったということを示す。またこれは彼が Gregory に対してこれまで何にこだわってきたのかをも示している。彼は継子を息子として扱うことは、その子に「私」が相続するはずの財産を幾らかでも浸食させると考えて、それを嫌ったのである。息子として扱うことは（ルカ伝 15 章の放蕩息子や “Half a Life-Time Ago” の Michael の例を持ち出すまでもなく）相応の分け前を渡すことを William に連想させたのである。要するに William は小農場経営者として、土地分割をしたくないという、また土地を自分の「肉親」に相続させたいという本能的欲求に基づいて 16 年間継子を扱ってきたのである。従って Gregory を悲劇的な自己犠牲に追いやった真の原因はここにあったと言える。

しかし彼が後悔する土地所有者と描かれていることも重要である。彼は Gregory が死んだ時には 60 歳を越えていたことになる。つまり彼は年を取ったあとで自分の非を悟ったのである。しかし手遅れの後悔は役に立たないとされる作品が多いなかで、彼の後悔は死後の和解の可能性として、肯定的に描かれている。彼は遺言状通り、Gregory と彼の母との足元に埋葬されたはずだからである。これはこの物語が、作者の後期作品の重要なテーマの一つである回心する地主の問題と繋がっていることを示す。William が「別の男の子供」に自分の土地を半分与えるという発想ができるようになったということは、彼が没落していく地主たちと同じ良心的な資質を持っていたということである。本来ならもっと責任を感じてもよいはずの「私」の方は、父のような純然たる自作農（statesman）ではなく今や地主（squire）であると前置きに定義されているように、没落どころか逆に繁栄していく型の人物であることを思うと、一層 William の後悔は価値があると言えよう。

Works Cited

- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Charlottesville and London: UP of Virginia, 1992.
- Chadwick, Ellis H. *Mrs. Gaskell: Haunts, Homes, and Stories*. London: Sir Isaac Pitman and Sons, 1913.
- Duthie, Enid L. *The Themes of Elizabeth Gaskell*. London: Macmillan, 1980.
- Gaskell, Elizabeth. "Cumberland Sheep-Shearers." 1853. *A Dark Night's Work and Other Stories*. Ed. Suzanne Lewis. Oxford: Oxford UP, 1992.
- . "Half a Life-Time Ago." 1855. *Cousin Phillis and Other Tales*. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 1987.
- . "The Half-Brothers." 1859. *My Lady Ludlow and Other Stories*. Ed. Edgar Wright. Oxford: Oxford UP, 1989.
- . "The Sexton's Hero." 1847. *The Moorland Cottage and Other Stories*. Ed. Suzanne Lewis. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Sanders, Gerald DeWitt. *Elizabeth Gaskell*. 1929. New York: Russell, 1971.
- Ward, A.W. Introduction to "My Lady Ludlow," Etc. *My Lady Ludlow*. By Mrs. Gaskell. Ed. A.W. Ward. 1906. New York: AMS, 1972.
- Wright, Terence. *Elizabeth Gaskell: 'We Are Not Angels' — Realism, Gender, Values*. London: Macmillan, 1995.